

論説

日本語文書処理

山田 尚勇†

漢字かな交り文は、必要な異なり文字数が数千に及ぶため、コンピュータ関連作業においては長いあいだアルファベットが主となり、かなが併用されるという変則状態が続いてきている。

しかし、一般文書処理の世界ではどうしてもふつうの表記法を使わなければならないから、長いあいだそれなりの苦心は続けられてきた。その古いところのことについては、たとえば文献¹⁾が参考になる。

コンピュータ関連の製造技術の急激な進歩により、1978年前後にはかなり複雑な日本語処理一般の経済的可能性を到来させた。この年の7月には情報処理学会の主催による「日本語情報処理シンポジウム」が4日間にわたり静岡県伊東市において開催され、30件の論文発表と、14件のポスタ・セッション展示があった²⁾。また翌8月には第19回全国大会においてパネル討論「漢字入力法の人間工学的検討」が催された³⁾。

しかし、それはまだ人びとが日本語処理の実用化到来を感じ取り、それに応えるべき熱気がうず巻きだしたというところであつたらう。上の前者のシンポジウム報告集に収められた論文30件のうち、どちらかと言えば短かいものわずか4件半が活字印刷になっているだけで、あとは手書きのままの印刷である。ポスタ・セッションの記録9件のほうも、活字化されたものは2件に過ぎない。後者のパネル討論会の別冊予稿にいたっては執筆者6人分のすべてが手書きのままの印刷であつた。つまり、日本語処理の研究者たちでさえ、まだその処理システムを一般に実用にする状況には至っていない。

しかしこの年の秋にはカナ漢字変換入力方式の日本語ワード・プロセッサ JW-10 が東芝(株)から商品として市場に送り出され、その後は他社の参入も相次ぎ、日本語ワープロの実用化時代が始まった。

表記法のむづかしさからくる印字出力と内部処理の技術的問題点はなんとか克服できてきたものの、毎分60語、日本語にして毎分120字から150字相当はふ

つうに処理している欧米のタイプライタ/ワープロ作業に比べて、日本語ワープロの場合は入力が高能率化のネックになっている。

それで1979年度には、情報処理学会の内外からの要請に応え、日本語入力問題の研究連絡にあたる非公開の「日本語入力法研究委員会」が、慶応大学の故高橋秀俊教授を主査として発足した。

日本におけるこの種の組織の研究活動はとかく技術重点主義に落ち入りやすい。いっぽう、入力の問題を全体としてとらえて見れば、明らかに人間・機械系の問題である。したがって、どういう観点から入力問題を追求するにしろ、その枠内で最適化を図るのには、まず人間の本性が十分理解されていなければならない。

そうした考察に基づき、委員の選定に際してはこの総合的観点が十分活かされるよう、広く関連分野からの専門家の参加が計られた。その結果、総計25人の委員の中には技術関係者はもちろん、日ごろ高速タイプライタ技能を駆使している速記者、タイプライタ技能教育の専門家、労働医学の臨床医、基礎医学を背景に持つシステム工学者などが含まれていた。これら人間の側からの専門家はその後2年間、研究会の動向に多大の影響を与えた。

日本文化の一面として、外国にお手本となる問題が存在しない分野で境界領域的研究を日本で行うのはなかなかむづかしいと言われているようであるが、当「研究委員会」でも関心が技術重点にかたむき、人間の立場からの委員の割り合いが時とともに減少をみた。

しかし、この「研究委員会」は2年間にわたり計21回の会合を開き、精力的に研究情報の交換活動続け、37件の研究報告がなされた。

テーマが本質的に地味なものであったにもかかわらず、実用面におけるその重要性のゆえに、本学会内外の要請もあって、非公開形式の「研究委員会」は1981年度に、学会の制度に沿って公開の「日本語入力方式研究会」へと発展的組織替えを見た。

† 東京大学理学部

その活動の皮切りとして、その年の10月には「研究委員会」時代の成果を中心としたシンポジウム「日本文の入力方式」が開催され、論文10件の発表とパネル討論会「日本文入力法の将来像」が催された⁴⁾。

その後の4年間に計20回の研究発表会が開かれ、総計68件の発表があった。それらのテーマは、文章の分野別特徴、人間工学的基礎、各種入力法の研究と比較、オペレータ教育法、文書処理方式と制御言語、オフィス・オートメーションとの関わりなど、「研究会」の標榜するもの全般にわたっていたが、「入力方式」という「研究会」の名称の表現に影響されてか、各種入力方式に関する発表が圧倒的に多かった。

この間、1983年秋には「中文信息処理国際研討会」が中国で開催され、また日本では「文字種の多い言語の処理に関する国際会議」が本学会の共催で開催され、ともに入力と関連が深い会議とあって、「日本文入力方式研究会」関係者による多数の論文の発表があった^{5), 6)}。

この「研究会」は1984年度をもって終了したが、本1985年度からは研究対象分野をさらに広げた「日本語文書処理研究会」が新たに発足し、多くのテーマの1つとしてではあるが、入力方式の研究も引き継がれている。

「入力方式」およびその後継である「文書処理」研究会から推薦された創立25周年記念論文候補の選定に当っては、研究連絡会において、まず過去の「研究委員会」、「研究会」ならびに「シンポジウム」において発表された論文計115件などを調査した上で、最新の成果を反映させるべく、最終的には公募論文の中から選定する方針が採られた。

あらかじめ激しい競争が予想されたせいか、公募の結果は応募数5件と意外に少なかったが、ベテラン研究者たちによる力作揃いであった。そのテーマは、キーボード入力関連2件、手書き文字入力関連1件、エディタ関連2件であった。

多様にわたるテーマの論文の中からの入選候補の決定経過は、英語で言うところのリングとオレンジとの優劣を比較するような選考になった。数次の研究連絡会において審議を重ねた結果、手書き文字入力の本質はむしろパターン認識と言語処理などにあること、ま

たエディタ関連の研究は今度新しく発足した「文書処理」研究会にも向いたものであることなどが考慮され、「入力方式」研究委員会と研究会の過去6年間の研究発表の中心テーマであった入力方式そのものを取り組んだ残り2件のうち、特定の方式というよりは、人間機械系のモデル化とその実験的検証という研究の基礎性が評価されて、ここに掲げられた論文が「入力方式」研究会の代表論文として編集委員会に推薦された。

終わりに、一般に使われている入力方式としては発音表記から漢字かな交り文へと変換するものが定着しつつある。しかし、大量のテキストを専門的に常時処理しなければならない熟練者用の入力方式には、まだ十分満足すべきものがないと言ってよい。しかも、1983年の末あたりからはワープロ・オペレータの中に強度の労働障害を示すものが多出して社会問題になっている。したがって、地味ではあるが、日本文入力方式には人間科学の視点から詰めて行かなければならない底の深い問題がまだまだ残っているというのが、筆者の考えである⁷⁾。

参 考 文 献

- 1) 石田晴久、浦城恒雄編：漢字情報処理特集号、情報処理、Vol. 10, No. 5 (Sep. 1969) (論文5, 解説5, 資料1, 寄書4収録)。
- 2) プログラミング・シンポジウム委員会編：日本語情報処理シンポジウム報告集、情報処理学会、伊東市、372 pp. (July 1978)。
- 3) パネル討論：漢字入力法の人間工学的検討、情報処理学会第19回全国大会論文集別冊、pp. 12 (Aug. 1978) (情報処理、Vol. 20, No. 3, pp. 225-236 (Mar. 1979) 参照)。
- 4) 高橋秀俊編：シンポジウム「日本文の入力方式」論文集、情報処理学会、137 pp. (July. 1981)。
- 5) Proceedings of 1983 International Conference on Chinese Information Processing, 北京、中国中文信息研究会、3巻 (Oct. 1983)。
- 6) Proceedings of 1983 International Conference on Text Processing with a Large Character Set, 東京、情報処理学会 (Oct. 1983)。
- 7) 山田尚勇：専任タイピスト向きタイプライタ入力法の研究経過、コンピュータソフトウェア、Vol. 2, No. 1, pp. 54-64 (Jan. 1985)。

(昭和60年7月1日受付)